

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省林野部林務局第六七七号
令和三年十一月一日発行 第四二十四巻第十一号

ホトトギス

十一月号



風雅の小筥（四十六）

廣太郎

小花つけ抜くには惜しき草のあり
農鳥のくつきり見えし今朝の富士
青々と雑草からむ散歩道

この三句で皆様は何かお気付きになつたろうか。そう、やはり季語が無い句と言わざるを得ないであろう。ただ、一句目は草を抜くという事が表現されており、何か「草取」の季題を想像するが、やはり、言葉としての季題が必要であろう。二句目は「農鳥」という言葉があり、聞いた話であるが山の雪が解け出して、その雪間が鳥のように見える事を言うそうだった。そしてこの現象が起こる頃から農事が始まるという。それを考えると確かに季節感はあるが、この言葉を辞書で調べると「農鳥岳」という山の名前が出て来て、正にこの現象に由来した山の名であるそうだが、やはり季題としてはこの言葉は掲載されていない。三句目も季題が無いが、句柄から感じるのは、青々とした草、つまり「草青む」というニュアンスなのかも知れない。このように季節はあるが季題の無い句、そして反対に季題があつても季節の無い句というのも存在するようだが、これも聞いた話で恐縮であるが、虚子にある人が、季題があつて季節の無い句と季節があつて季節の無い句のどちらを採用するか、という質問をしたところ、虚子は躊躇無く季題のある句を採用すると言つたそうだった。

前掲句は実際ホトトギスに投句された句であり、最近無季の句は結構多くあるように思われる。少し考えて頂ければ如何だろうか。

旬日記 汀子

令和二年十一月一日 下萌句会

初霜と聞きしばかりに集ふ会
座る席決めて落着く寒さかな
久闊を叙し冬ぬくき再会に
入れ替りメンバー揃ふ神の旅
冬ぬくし緊張解けゆきにけり

十一月二日 ロイヤル俳壇

咲きつづく旅の記憶の石路の花
これよりの旅に期待の石路の花
生涯の旅今日の旅石路の花
冬めくと思へば元氣取戻す
人数の揃ひたるより冬ぬくし

十一月十日 大阪倶楽部

初霜に気づきしよりの家居かな
咲いてゐる筈公園の石路の花
マスクすることも忘れて出掛け来し
小春日のあれもこれもと忘れもの
世の中について行かねばならぬ冬

十一月十日 綿業倶楽部

あれこれと忘れ霜月なりしかな
見捨てしにあらざ忘れし花八手
冬めくと思ひしことも忘れぬし
大根を料るこれより立つ厨
心して冬めく外出なりしかな
好き嫌ひ今はもうなく大根炊く
世の中に従ふ外出冬めきぬ

十一月十二日 清交社

我等寄り集ふ芭蕉の忌なりけり
又今日も冬暖かき日と集ふ
踏み又踏みては銀杏落葉かな
快晴の一日日芭蕉の忌なりけり
マスクせし人にマスクの目が笑ふ
快晴や冬あたたかき日もありし
教室の配置替して冬ぬくし

十一月十七日 有恒俳句会

星のこと二た言三こと冬の空
凧の止みし朝と気づきけり
落葉掃き庭面白くなくなりぬ
世の中の気になることも冬めきぬ
短日の二つの会となりけり

十一月十七日 無名会

凧の止み四日目は快晴に
マロニエの落葉の高となりけり
我が庭の落葉掃かざる二三日
落ち尽すまでは待てざる落葉かな
今の世の語り尽くせぬ落葉かな
庭師来てよりの落葉のはや嵩に
世の中に従ふ心落葉掃く
遠出にはならぬ旅路よ日短
遠き日々忘れ得ぬ日々落葉踏み

十一月十八日 夏潮句会

予定せし如く冬暖かき日に
身軽とも思ふ冬暖かき日に
入りくる冬日曇りぬ窓ガラス
皆マスクして挨拶の目が笑ふ
マロニエの落葉は終りたることに
暮早し午後の会とて心して
人数の揃はぬことも暮早し

『俳句四季』掲載

刻々の人生を生き去年今年
過ごしかた変ることなく年迎ふ
体調を心して春迎へんと

廣太郎旬帳 廣太郎

令和二年十一月四日 NHK文化センター1
下鉄を去れば大都會の支度
靴底の乾きし音に秋惜む

新石路の黄に朝躡のいてゐる羽音か
大海引地球の裏を引寄せたてな
小根空を染郷川の青き消かてな

初雀影らみそはとて祈り
初電話今年こきそはとて祈り
初岸に日差集めて初時雨

雑詠 廣太郎 選

湖中句碑下五の沈み梅雨出水 奈良 古賀しぐれ
 はせを句碑辿り湖族の郷涼し 同
 居住ひを正し老舗の鮎鮎屋 同
 青空の鼓動を集め雲の峰 横浜 高浜礼子
 家族分シートはためく梅雨晴間 同
 無防備な顔となり汗を拭く 同
 底見ゆる満濃池や喜雨来たる 神戸 藤井啓子
 喜雨来たるコンクリートの新宿に 同
 沙羅の花散るや千年またたく間 同
 こいさんの扇子いとはんより小さし 同 和田華凜
 白扇に言の葉生れやすきかな 同
 玻璃の皿海に見立てて夏料理 同
 青春の思ひ出の町緑濃し 長岡 安原 葉
 更衣君一段と若若し 同
 夏に入るといふにまだ病み臥す友よ 同
 湾岸を都心へ虹の伸びゆけり 東京 田丸千種
 塋域は鎌倉以来竹煮草 同
 玉虫の火傷しさうな翅拾ふ 同

喜雨ありて風の残りし夕べかな 京都 山崎貴子
 裏年を詫び沙羅の花語る僧 同
 この辺り喜雨の届かぬ地形かな 同
 預言者のごと捻花のあらはるる 熊本 岩岡中正
 学生の田植に帰省するといふ 同
 なつかしきものに上海花石榴 同
 月天心漣となる屋根瓦 東京 今井肖子
 ひんやりと月光白く闇あをく 同
 爽やかやきれいに割れるチヨコレート 同
 五月闇庭の余白を塗りつぶす 袋井 湖東紀子
 山といふ闇を離れて夏の月 同
 水中花古りたる水の疲れかな 同
 夏蝶の影夏蝶を追ひにけり 米子 中村襄介
 青空の覗けば梅雨の生き生きと 同
 映りたる山の頂踏む田植 同
 月涼し門限近きシンデレラ 大阪 酒井湧水
 酸っぱさのちよつと物足りなき李 同
 夕河岸やタイムサービス待つ客ら 同
 虚子像の襟の春塵払はねば 相模原 木村享史
 虚子像の耳に蜘蛛の巣とは不将 同
 天誅ぞ石もて叩く根切虫 同
 新入の荒鶉捌きも見せどころ 神戸 山田佳乃
 一跳びの力溜めをり雨蛙 同
 大南風紀淡海峡抉じ開くる 同

雑詠句評（十月号より）

人生を横たへてゐる藤寝椅子 熊本 岩岡中正

一見して「人生を横たへてゐる」とは、何とも大袈裟な言い方だと思つた。

しかし、藤寝椅子に体を横たえてみると現在のこと、未来のことを考えるよりも来し方の諸々のことが思い起こされてしまうのである。それは、藤寝椅子に横になる人を安心の世界に包み込む不思議な力があるからかも知れない。

しかも、昔からあるような古い藤寝椅子だと、そこで体を休めたであろう父のことや祖父のことなどに自然と思いを巡らせるものである。

こう考えてみると「人生を横たへてゐる」はちつとも大袈裟な表現ではない。季節としての藤寝椅子の特色を十分に味わえる境涯の一句と思う。（しげ人）

藤で編んだ寝椅子は夏の暑い時には結構涼しくて気持の良いものである。ついうとうとと昼寝をしようとする事もある。それに加えて何か布団とは違った不思議な感触があったりもして、神秘的な感覚を呼び覚ますような寝心地である。「人生を横たへ」という言葉がその事を物語っている。（廣太郎）

夫逝きて仰ぐ若葉の空痛し 東京 岩村恵子

長いこと闘病生活にあつた最愛の夫がついに若葉の頃にお亡くなりになられたと聞いた。クリスマスチャンとして神に召された夫のことを想い、来し方の様々な思い出が脳裏をかすめ、仰ぎ見た空に涙したのであろうか。「痛し」に温厚な作者の心情をうかがい知ることが出来る。

まだご逝去されたばかりで幾ばくも経たないが、作者の心身の疲れの方が気になる。夫と告別した後の作者の心情は察するに余りあるが、呉々も健康に留意され、ご自愛なされますよう祈るばかりである。（紀元）

初々しい初夏の若葉は、穏やかな薄暑の目には誠に清々しい。そんな景色を毎年御主人様と愛でておられたのであるが、その御主人も帰天されたのである。御主人亡き後一人で見る若葉も毎年同じように初々しく色付くが、御主人との思い出を重ね合わせる少し感傷的になるのである。（廣太郎）

天地有情

女子選

思ひ出の中に開きぬ月見草 東京 今井千鶴子
 日本語を大切にして書を曝す 同
 再会の友等待つ町ライラック 長岡 安原 葉
 リラ冷もまたなつかしき旅の街 同
 富士を見てより恵方道開けゆく 東京 稲畑廣太郎
 指揮棒の先より生るる淑気かな 同
 老の待ち野山も待ちし五月来ぬ 相模原 木村享史
 美しき五月も会へぬままに果つ 同
 点滴の腕の白さや梅雨に病む 東京 山田閨子
 でで虫のひととき吾のひとときよ 同
 永らへて亡き子に夏書奉る 平戸 辻 美彌子
 一山の喪を解き芭蕉玉を解く 同
 一日を生きゆく目覚め夏の朝 静岡 須藤常央
 学問の小さき一灯明易し 同
 月下美人孤高咲いても閉ぢりても 神戸 和田華凜
 入り来て男の扇子忙しなき 同
 花合歓の雨遠ざけてゐる二階 西宮 本郷桂子
 花合歓の散り敷く雨の大地かな 同

短夜と思ひつつ書き継げるかな 熊本 岩岡中正
 いつの間に消えたるものに田植唄 同
 喜びも悲しみも夢夏の朝 東京 河野昭彦
 短夜の途切れ途切れの夢見かな 同
 振花を残して芝を刈れと言ふ 淡路島 高田 非路
 雨中とて確と咲きぬし鉄線花 同
 面構へ失つてゐる蛇の衣 八代 山下しげ人
 蛇衣を脱いで社へ消えにけり 同
 日課終へ義父の着流し夕端居 淡路島 木下圭子
 坪庭に蚊取線香義父の黙 同
 こぼと音して父の日のプレゼント 神戸 三村純也
 財布より取り出しみせて蛇の衣 同
 三瓶野へ涼しさへ踏み入りにけり 同 山西商平
 夕菅を舞はせて風はメルヘンに 同
 箱といふ小さき苗代種を蒔く 加須 岡安紀元
 み吉野の落花といふは奈落まで 同
 丹精の色で埋めて薔薇の庭 龍ヶ崎 今橋真理子
 梅雨晴を使ひきつたる庭仕事 同